

二階の方で「ツマミ出せ」狂人だ」と叫ぶ奴がある。

脳味噌のない頭を持つて来い、穴をあけてやるとか言つて、僕は八つ當りにタンカを切つた。遂々辯士は立往生して下る。

知り遇ひの青年が、「二階に上りませう」と僕を連れに来る。

僕は今度は新聞記者席に腰を掛けて、鳥打帽の廂を後にやつて、インベネスを着て居たが、一番最後に遂々演壇に上つた。

「南無ダアダ。

僕は高橋新吉と云ふケチな男だ。

おまけに精神病者だ。

今度東京から大阪まで汽車で、それから船で歸つて来た。

四國通還鐵道も、八幡濱は支線になるとかで、

乗り換へなければならぬ、不便だ。

キサマ達があまりに、窮々ガヤ／＼騒いでゐるから俺の弟も死んだ。